

ミクロ社会学への転換

—G. シンメル, C. H. クーリーなど—

濱田 勝宏*

Introduction to Micro-Sociology

—G. Simmel, C. H. Cooley etc.—

Katuhiro Hamada

要 旨 現代社会の社会構造変動の特性や問題点を核家族に焦点をあてるという視角で、マクロ社会学の立場から考察する作業を進めてきた。その際、都市的生活構造概念を整理し、その三要因という局面からの検討を行ってきた。特に、この両三年は、生活関係構造との関連から、シカゴ学派社会学の再検討も含めて、論稿を提出してきた。その間、コミュニティ、近隣、友人といった人間関係的側面においては、マクロ社会学特に構造機能理論だけでは処理しきれない諸問題が多いことに改めて気づかされた。そこで、一転してこれまで看過することの多かったミクロ社会学的手法の導入を考え、生活関係構造、生活文化構造における課題の処理に役立てたいと思う。富永健一のマクロ社会学、ミクロ社会学の区別¹に負うところ大であるが、その基本線にたちつつ、G. シンメルの相互行為、C. H. クーリーの社会心や第一次集団にみられるミクロ社会の成立をふまえながら論考の方向を示した。アメリカ社会学の中に脈々として流れるミクロ社会学の文脈を再び評価する作業の必要性も強調したところである。

1. はじめに

現代日本の社会を社会学的に把握することを企図して、いくつかの方法を試みた。その過程で、現代日本社会の変化や社会的諸問題をきわめて身近な距離で観察し、同時にそれらの脈絡をシンボリックに抽出する場として「家族集団」が適切であると判断するようになった。現代日本の家族集団は、大都市部においては、1920年代から核家族化が著しかったとはいえ、基本的にはいわゆる高度経済成長という社会的経済的变化のうねりとともに、核家族をその中心におくようになった。そして、今日では、都市的生活様式を基盤とする現代社会のゆたかな生活の典型的な家族形態としての核家族が一般

化している。これらの背景には、戦後期の急激な改革——しばしば、民主化と標榜されてきた——を通じて、イエ制度やイエの観念が否定される一方の極に、アメリカ型大衆消費社会に共通する近代的な生活をシンボライズする媒体としての核家族への憧憬があったことも事実である。高度成長期の社会的構造変化が加わることによって、核家族化は加速され、核家族を基本とするライフスタイルへの讚美も継続して今日に至っている。

核家族を典型とする都市的生活様式の具体的展開は、徐々にその問題点を明らかにするようになって久しい。もちろん、核家族化を希求した戦後日本の都市住民の心情や、社会的経済的变化の影響を一身に受けて、核家族化という様式でスリム化した家族集団の変化に、責任を帰するものであってはならない。ゆたかさを追求し、第二次産業ないし第三次産業に職域を求め

* 本学教授 社会学

た結果、相対的ゆたかさの体现者となった都市住民や、都市化の波で都市移住を余儀なくされた多くの人々は、戦後日本社会の変化の申し子に他ならない。また、家族集団も資本主義経済の高度化に呼応するように、社会的に適応を容易にするための集団的形態を核家族に収斂させ、大多数の人々が核家族化を讃美する結果となったにすぎないのであり、その点を問題視することは論外である。

家族集団が核家族化という方向に集約し、また、その環境を近代化の延長線上で高度大衆化段階へのステップアップに求めた結果の相乗効果が、文字通り、今日の家族問題にほかならない。それらの状況を社会学的に明らかにする視点として、都市的生活構造概念を抽入することは有効である。そのような判断にたって、都市的生活構造の三要因をもとに、検討を続けてきたのが、今日までの作業である。

都市的生活構造については、生活構造概念の未整備とその拠点の設定（家族集団すなわち核家族か個人か）に関する見解の相違という難題をかかえながらも、一定の立場を鮮明にすることによって、現代人の生活実態における問題性を明らかにするうえで有効であったと思う。すなわち、都市的生活構造の三要因として、外枠的要因（生活時間構造、生活空間構造）、媒介的要因（生活手段構造、経営・家計構造）、内部的要因（生活関係構造、生活文化構造）を設定するとともに、それぞれの構造的局面で生活実態を分析することを試みたつもりである。それらの作業のなかで、マクロ、ミクロの違いをこえて、これまでの社会学研究が理論的に積みあげてきた結果が有効に作用したことは、言うまでもない。

これまでの現代社会分析に関わる家族社会学的なアプローチ、あるいは生活構造論的な視座は、主としてマクロ社会学の手法をより強化するものであった。また、T. パーソンズ流の行為論や AGIL 理論の私的な応用に墮したものであったにせよ、その基本的な視角は、旧来のヨーロッパ型マクロ社会学のそれに傾斜するも

のであった。そのことは、これまでの作業のなかに、G. ジンメルを起点とするミクロ社会学を相応に位置づける努力を欠いていたし、必要以上に、マクロ的視点を優先させるあまり、ミクロ的視点を軽視するというものでもあった。これは、一見、理論的バランスを欠くものであるばかりでなく、一定の課題に対する総合的な分析を試みるうえでは、結果的にはなほだ不十分なものという批判を受けること必定といわねばならないものである。この点は、遅まきながら自らの見識の至らざるを率直に反省しなければならないと痛感するところとなった。加えて、社会構造変動という問題意識の対極に、現代人の生活の一面である衣生活の変化や流行追随への関心も有する立場として、理論的な不備を認めない訳にはいかない。いずれにせよ、ここまで通覧するだけで看過に等しい態度でやり過していた理論の文脈に改めて、解説の作業と応用の試みを開始しなければならないと思う。端的に言って、しばしば引用し、また依拠することもきわめて中心部分として意識してきた富永健一によるミクロ社会学への回帰であるとともに、社会学史的には第二世代と言われ、アメリカ社会学における第一世代と目される人々の理論に関する再読と再検討にほかならないのである。具体的には、本稿では、C. H. クーリーの「社会組織論」に久しぶりに戻ってみたいと思う。

2. ミクロ社会学ということ

社会学の研究的視座としてのマクロとミクロという二分法は、歴史的にみても議論のあるところである。それらをここで概観する余裕はないが、その端緒となるべきは、G. ギュルヴィッチの微視社会学と巨視社会学であろう^{注1)}。すなわち、社会は、個体としての人間個人の複合体であるから、行為、相互行為、小集団のレベルでの分析にはじまって、説明を可能にするという方法が、ミクロ的なアプローチである。一方、集合体としての全体社会を観察すること

によってその構造を明らかにすることに力点を
おくとともに、その機能が個体へ及ぼしている
影響を明らかにするという方法が、マクロ的ア
プローチの特徴である。無論、G.ギェルヴィ
ッチのほかにも、ミクローマクロの対立軸を用
意して方法論を展開した先達が多い。そしてそ
れらは、細部において相違があるといわねばな
らない。したがって、ここでは先稿までの論述
において依拠するところ大であった富永の所論
を簡単にふりかえることとする。そのうえで、
これまでとほぼ変わりなく、そのミクロ社会学に
関する把え方を継続して、次のステップにつな
いでいくこととしたい。

富永は、一連の研究的著述において、社会の
ミクロ理論と社会のマクロ理論、ないしはミク
ロ社会学とマクロ社会学といったセットを設け
ることから、理論構築の作業に着手している。
彼のミクロ・マクロに関する認識は、その社会
学に関する改まった定義にまず据えつけられて
いる。すなわち、「社会学とは、複数の人びとの
相互行為、相互行為の持続をつうじて形成され
る社会関係、共属感情のような人びとの社会的
態度、複数の社会関係のシステムである社会
システム、その社会システムの構造と機能、なら
びにそれらの構造と機能の変動について研究
することを専門とする経験科学である」として
いる^{註2)}。富永は、その社会学の将来的目標に
構造・機能・変動論の展開を見据えているの
で、構造と機能の変動という枠組を社会システ
ムの分析にあてはめようとしている。これは、
富永社会学の特徴であり、その最重要課題でも
あろう。そして、その前提に複数の人びとの相
互行為、相互行為の持続的形態としての社会関
係が、社会の構成要因として存在すると説く。
したがって、社会システムの構造と機能に関す
る分析の眼がマクロ的であるとするならば、そ
の前提にもなっている人びとの相互行為、相互
行為の持続的総体としての社会関係は、ミクロ
的である。これは、関係する人びとの総量の多
少を意味するものでもなければ、社会関係や社
会的相互行為の規模の大小を問うものでもな

い。その点の区別は、富永においては、きわめ
て明快であり、旧来のミクロ・マクロの対立軸
にみられた区分の不明確さは清算されていると
いってよい。少しくその点を洗ってみる。

「複数の人びとのあいだに持続的な相互行為
の集積があることによって社会関係のシステム
が形成されており、彼等によって内と外とを区
別する共属感情が共有されている状態」を狭義
の社会と定義する彼は、社会のミクロ的認識の
出発点を狭義の社会を成立せしめる複数の個人
による相互行為に求めている^{註3)}。つまり、個人
は、欲求または何らかの動機づけによって行
為を起し、欲求充足または満足度を高めると
いう目標を希求する。これら個人の行為に関す
る個人の欲求や動機づけ、そして欲求充足や満
足などは、すべからく個人に関わることであ
る。これら個人のレベルでの相互行為の関係や
コミュニケーション行為の問題は、社会システ
ムや社会集団ないし地域社会といった局面とは
次元を異にするものと認識できる。もちろん、
前述の通り、これら個人のレベル、すなわちミ
クロの社会は、個人が究極的に社会や社会シ
ステムを必要としている実態からみて、連続した
一体性をもつことは否定できない。ただし、社
会学的考察の方法論的区分としての行為ないし
相互行為は、個人の価値や感情にもとづく内発
的性格の色濃いものであり、心理学的でさえあ
る。一方、家族集団、地域集団、機能集団など
と類別される社会集団や、村落、都市などの地
域社会は、個人的欲求や人びとの相互行為の単
なる総和を越えた自律性を有するものであり、
個人との関わりはその意味でマクロ的である。
このように、個人の行為、社会化、適応などに
みられる内発的部分と人びとの相互行為との関
係に視点をおく方法をミクロ社会学とする。一
方で、富永の分類では、社会集団（基礎集団と
機能集団）、地域社会（村落、都市）、準社会
（群集）からなる部分社会に視点を集中させると
ともに、同様に社会集団としての国家、地域
社会としての国民社会、準社会としての社会階
層、市場、民族・国際社会にも分析の眼をむけ

る方法をマクロ社会学とすることができる。

そこでマイクロ社会学の起点を社会学史的にはどこに求めるべきであろうかという点が、次なる課題のひとつである。先述の G. ギュルヴィッチは、今日いうところの現象学的社会学の立場でマイクロ社会学を提唱した人とされ、その意味以上にマイクロ社会学の重要拠点として評価されていると思われる。富永は G. ギュルヴィッチを評価しつつも、さらにさかのぼること G. ジンメルにいたる。G. ジンメルを「形式社会学」というくくりだけで見てしまうのではなく、G. H. ミードや C. H. クーリーなどのいわゆる「心理学的社会学」に通底するマイクロ社会学の開拓に評価の眼を向けようという主張である。すなわち、G. ジンメルは、なるほど社会化の形式を相互作用の成立に求め、その結果として成立する統一体を「社会」として認識しているが、これはやがて後世の人びとが、相互行為の持続する関係としてのマイクロ社会ととらえたことに連なるものにほかならないと考えるべきである。その点を富永は、心的相互作用として括り、そのことが相互行為に関する最初の着目であったとする。G. ジンメルによれば、以下の通りである。やや長くなるが、彼に戻って整理しておきたい。すなわち、「性的とか宗教的とか、あるいはたんなる社交的な衝動、防御や攻撃といった目的や、さらに遊戯や営利、援助や教授、その他無数の目的が原動力となって、人間が他者と集合し、互いに助けあい、互いに共存し、互いに対立しあって行為し、また境遇を他者と相互関係におくようになる。いいかえれば、他者に作用をおよぼし、他者から作用をうけるようになるのである。このような相互作用の意味するところは、右のような相互作用をうながした衝動や目的の個人的な担い手たちから、ひとつの統一体、ほかならぬ『社会』が生じるということである。それというのも、経験的な意味での統一体とは諸要素の相互作用にほかならないからである」^{註4)}。

きわめて慎重で重厚な説明のもとに論理を展開する G. ジンメルらしい表現の中に、まさし

くマイクロ社会の発生を確認することができる。彼の用語はあくまでも相互作用であるが、相互作用の担い手たちの中に存在する相互行為の連続体（統一体）は、社会化の様式（形式）を内包するものでもある。「飢餓も愛情も、労働も宗教心も、技術も知性の機能や成果も、それらが純粋な意味にしたがって直接にあたえられるかぎりでは、すべてまだ社会化を意味するものではないのである。むしろそれらが孤立して並存する諸個人を共存と互助という限定された諸形式——つまりは相互作用という一般的な概念のもとに属する形式——にまでかたちづくることによって、はじめてそれらは社会化を形成するのである。したがって社会化とは無数のさまざまな様式で実現される形式であり、この形式のなかで諸個人は、右の諸関心——感性的あるいは理想的、瞬間的または持続的、意識的あるいは無意識的、原因としてかりたてるものやまたは目的としてひきつけるような——を基礎として、ひとつの統一体に合成されるのであり、したがってこれらの関心もそのような形式のなかで実現されるのである」^{註5)}。社会化の実現について、以上のように記した G. ジンメルは、後に「心的相互作用」という用語を用意してマイクロ社会の成立を確認し、そこに関係する彼独自の社会学の必要性を説いたのであった。すなわち、社会現象や個人の体験としてのリアリティを観察することについての視点や視角の相違や距離が有する重要性を論じたあとで、このように続けている。「全く別の立場からすれば、社会概念の妥当性を損わずに、しかも真実の人間生活は個人のみにあることも可能なのである。社会概念を最も広く解すれば、諸個人間の心的相互作用を意味する」（傍点、引用者。^{註6)}）。端的にマイクロ社会を心理的相互作用に集約することができることを主張する彼は、以下のようにも明言する。「(前略)。本当に社会を作っていると言えるためには、こういう（二人以上の個人が相互に瞬間的な関係を有すること。引用者）相互作用がもっと頻度や強度を増し、それに似た相互作用と結びつきさえすれば

よいのである。社会という名称を永続的な相互関係だけに限るのは、即ち、国家、家族、ギルド、教会、階級、目的団体など、名のある統一的構成物に客体化された相互関係だけに限るのは、日常用語（中略）に理由もなく固執するものである。しかし、こういう相互関係のほかに、人間と人間との間には、もっと小さな、一つ一つとしては問題にもならぬような関係形式や相互作用様式が無数にあって、それらが公的とも言える大きな社会形式の間へ忍び込んで、それではじめて世間でいう社会が生れるのである」（傍点、引用者。^{註7)}。

このように、G. ジンメルの述べることを追っていくと、社会学的なアプローチの対象と方法をめぐって、繊細なまでの検討がなされ、そのひとつの結果として今日でいうところのミクロ社会学の必要性が説かれている。因みに、彼は「社会分化論」に「社会学的・心理学的研究」という副題をつけることを忘れなかったばかりでなく心的相互作用（用語としては後に用いられることになるが）を基調とする個々人の相互行為への分析の必要性を通じて社会学の構築を企図したことは、今日においても十分評価されてよいことといえよう。彼は、社会学のその後の研究の方向性を見すえて、以下のようにも述べている。「すべての科学というものは、或る特定の概念に導かれて、諸現象の全体や体験的直接性から一つの系列乃至一つの側面を抽象するものである。従って、社会学が個人の生活を分解し、社会学固有の概念によって新しく総合しても、他のすべての科学と同様、正当なことを行っているのであり、また、人々が眼に見える個人生活の全体を展開する場合でなく、彼らの相互作用によって集団を形作り、この集団生活によって規定されている場合、これらの人間がどうなるか、如何なる規則によって動くか、それを問題にしても、他のすべての科学と同様、正当なことを行っているのである」^{註8)}。ここに用いられた科学という語は、基本的には科学一般を意味するものと解すべきであろうが、さらに進めて考えれば周辺の社会科学を意

味してもいよう。そして、ようやくその方法をめぐって、市民権を得るにいたった社会学の一領域としてジンメル流ミクロ社会学の必要性を主張するくたりにもなっている。

3. アメリカ社会学におけるミクロ社会学

社会を個人と個人との相互行為に分解して考えるという方式は、A. コント以来の社会学の視界にはあまり存在しなかったし、存在してはなはだ軽視されるものであった。この点を相応なステージに浮上させ、社会学的分析の一視座として定置したのは、ほかならぬ G. ジンメルである。

このような G. ジンメルの所論は、その後、行為論あるいは相互行為論の展開へと継承された。その中で、富永は、L. V. ヴィーゼを経て、アメリカの初期社会学者たち（この人々はいずれも社会心理学者として一括されることが多く、それだけに、G. ジンメル的である）の所論に、ミクロ社会学の流れを見据えるという見解をとっている。つまり、いわゆる社会学第二世代に属するアメリカ（第一世代後期）の心理学的社会学者たちは、一方においてミクロ社会学を飛躍的に展開させる足跡を残し、他方において「ダイアドにおける相互行為」論としての理論的文脈を形成したといつてよい。「ジンメルによれば、教的に最も簡単な社会的相互作用の形態は、『二人結合』あるいは『二人集』、つまりここでいうダイアドである。もちろん二人結合に先立って孤立した個人を考えることができるが、個人が他のだれとも相互作用しない状態は社会学的ではない。現実には、そのように他のだれとも相互作用しない個人というものは存在しないから、ある人が孤独であるというのは、かつて彼と相互作用していた他者があって、彼に影響を及ぼしたのち、立ち去ってしまった状態にほかならない。同様にして、自由とは他者による拘束からの解放によって得られるものであるが、それは他者との関係を絶対的に

拒否するものではなく、人はその自由を用いて他者に影響を与えようとする」²⁹⁾。富永は、G. ジンメルの説くところを順に追いながら、ダイアドの起源も G. ジンメルに認められるとしている。すなわち、ダイアドは、相互作用の発生する起源であり、ミクロ社会学でいうところの社会の成立をみる場であるということになる。このような G. ジンメルに関する理解にたつとすれば、時代的にはほぼ同じ範囲に属する人びと、すなわち、社会学二世代のなかに着眼点の相違をこえて、萌芽していたことになる。すなわち、同世代のフランスにおいては、「模倣」を基軸においた G. タルドがそれにあたり、アメリカにおいては「第一次集団」で知られる C. H. クーリーである。アメリカにおいては、C. H. クーリーを経て、G. H. ミードが確立したシンボリック相互作用論につながることは、いうまでもない。そこで、本稿では、G. ジンメルの所論と富永の指摘を基本におきながら C. H. クーリーに少しく注目してみたいと思う。

アメリカ社会学と称するアカデミックな文脈は、A. スモールによってシカゴ大学に社会学科が創設された頃に鮮明になる。1892年の創設以来、シカゴ学派社会学は、一時的にせよアメリカ社会学の代名詞になったことさえあるくらいその業績は卓越したものがあつたし、研究の領域と方法においても、後にアメリカのみならず周辺の国々の研究者に与えた影響は顕著である。そのような時期は、A. スモールのほか、W. G. サムナー、F. H. ギディングズなどが、アメリカ社会学の構築に大きく貢献した。加えて、E. A. ロス、そして C. H. クーリーを含む 6 人を、成立期のアメリカ社会学の「ビッグ・シックス」と呼ぶことが多い。

さて、C. H. クーリーであるが、戦後日本の社会学界においても、高い評価のもとに例の「第一次集団」について説かれることが多かった。社会学の世界に身をおく者は、その大多数が C. H. クーリーの名を記憶し、「社会組織論」を通じて、第一次集団なる概念を理解したといっても過言ではない。

C. H. クーリー (1864-1929) は、ミシガン州アン・アーバーに生まれ、ミシガン大学を卒業後、ワシントン DC での勤務を経て、1892年ミシガン大学に戻った後、ほとんどアン・アーバーで過したという。

C. H. クーリーの業績は、「人間性と社会秩序 Human Nature and the Social Order 1902」、「社会組織論 Social Organization: a study of the larger mind, 1909」、「社会過程 Social Process 1918」の三部作をもって語られることが多い。そして、これらの中で展開した彼の論考のなかから生みだされた「第一次集団」や「鏡に映った自我 looking-glass self」の概念は、今日、C. H. クーリーの名とともに不巧の影響をもっているといえる。

特に、第一次集団は、いわゆるミクロ社会学における社会の成立という問題に大きくかかわるものである。また、鏡に映った自我は、自我の認識に関する人間の相互作用について、有効な概念として、今日でも論議の対象とされている。なお、第一次集団は、F. テンニエスのゲマインシャフトとならんで、人間社会における基礎的集団、あるいは親近性の強い地域社会やコミュニティを意味するものとして扱われている。その結果、ゲマインシャフトに対するゲゼルシャフトと同様に、第一次集団に対して第二次集団が文字通り用意されたかのごとく解されることが多い。しかし、C. H. クーリーは、彼自身の著作や論稿の中では、第二次集団という用語を使っていない。ただ、彼の教えを受けて、C. H. クーリーの死後、その業績を評価し、業績を社会に残すという意味でも力を尽くした K. ヤングをはじめとする人々が、第二次集団とその意味するところを整理し、第一次集団の対概念として市民権を与えたというのが実情である。以下、「社会組織論」に焦点をあてて、彼の第一次集団論について再読してみたいと思う。

社会組織論 Social Organization は、副題として「a study of the larger mind 拡大する意識の研究」が付されている。すなわち、この書の

構成が、第一部の「組織の第一次的側面」からはじまって、六部構成の最後にいたるまでの間、個人としての社会的相互行為と社会関係の範囲は、当然のなりゆきとして拡大することを前提としている。この拡大の方向は、単に社会集団や組織との社会関係の拡大に尽きるのではなく、意識の拡大であり、自我形成の局面の拡張を意味するものとみななければならない。このような社会学的な考察のスタートラインとして提出されたのが、第一次集団という概念である。

C. H. クーリーは、「社会組織論」の冒頭で、社会意識についてふれている。その中で、自己意識が社会意識に先行するという考え方が心理学者や社会学者のあいだにみられるが、それは誤りであると指摘している。そして、「自己と社会とは双生児のようなものであって、われわれは前者も後者も直接的に意識するのである。そして個個ばらばらの独立した自我といった観念はひとつの幻影にすぎないのである」^{註11)}。上のとらえ方は、個人が生きていく社会を、自己が何らかの方式で自己同一化しているものと認識すべきであるという彼の基本的な考え方を明示するものである。そして、かつてデカルトが「ワレ想ウ、故ニワレアリ」と認識したことに不満を述べる。その結果、C. H. クーリーがひきだした考え方は、次の通りとなる。「自我と社会とは、共通の全体がもつ両面として、ともに進行する。私は自分自身を意識しているのと同じように、直接かつ確実に自分が生活している社会集団を意識している。そして、デカルトが『ワレ想ウ』と言ったのと同じ根拠に立って、かれはこう言ってもよかったのではないか。『ワレワレ想ウ』と」^{註12)}。すなわち、ワレワレ感情 (we-feeling) を基本とする個々の人びとの間の関係は、相互行為であり、コミュニケーションであるが、それらを媒体として、「ワレワレ」は社会を形成し、自我を成長させるとともに社会への適応を可能にするという指摘に通じる。このような社会化の過程の出発点がほかならぬ第一次集団である。

彼は主張している。「私が意味する第一次集

■とは、顔と顔とをつきあわせている親しい結びつきと、協力とによって特徴づけられる集団なのだ。それらはいくつかの意味において、第一次的であるが、主として個人の社会性と理想とを形成するうえで基本的であるという点において第一次的なのである」^{註13)}。顔と顔とをつきあわせる親密さは、しばしば face-to-face という表現で括られるように、彼の著書から援用された用語である。要するに、第一次集団の基本は、何をおいても親密さと共同とによって支えられるという特性である。そして、同時に、個々人の社会性と理想を形成するという機能を果たす。このようなポイントを第一次集団は重要な属性として有するとしている訳である。そしてこのような特性・属性を有するものとして彼は、以下のように規程している。「この親しい結びつきと協力との、もっとも重要な分野——それはけっして唯一の分野ではないが——は、家族、子供たちの遊び仲間、近隣、もしくは大人たちの地域集団などである。これらは実際、一般的なものであって、発達のあらゆる階段に付属しているし、したがって、人間性と人間の理想における普遍的なものの主要なひとつの基礎なのである」^{註14)}。そして、加えて、家族、子どもたちの遊び仲間、大人たちの非公式の会合などは、「われわれの周辺の世界での人間性の養成所」とまで強調している。そして、彼は「人間性と社会秩序」で社会心 (social mind) という概念を提示したことはよく知られているところであるが、第一次集団との関連については、以下の通りの見解を残している。つまり、「集団的自然 (group nature) もしくは社会の第一次的側面 (primary phase of society)」とでもよばれるべき第一次集団の特性が、「社会心の比較的単純かつ一般的な条件」となるとしている。「それ (社会心—引用者) は、あらゆる社会においてなんらかの類似性がみられる、こういった単純にして顔と顔とをつきあわすことのできるような集団——たとえば家族・遊び仲間・近隣といった——のなかで発達させられ、表現される性質なのである」とし

ている^{注15)}。そして、人間は生まれながらに人間性をそなえているわけではなく、仲間同士のつながり以外には人間性を培う術はなく、孤立状態におかれればそれは朽ちてしまうとさえ断じている。

社会と個々人とを双生児の関係になぞらえ、「われわれ想う、故にわれあり」の認識にたつて社会の発生をみる。そして、その社会の一員としての基本を社会心ととらえ、その養成の場が、第一次集団であるとする考え方は、先のG.ジンメルの手法に共通するものである。相互作用と、相互作用が親密的かつ自然に、また、協力的に行われる場としての第一次集団とは、今となっては社会学的観点の相違とされがちであるが、社会の成立、個人の欲求や動機づけ、そして欲求充足と満足度の向上という人間がもつマイクロ社会的営為に直結するものといわねばならない。事実、C. H. クーリーは、この後「コミュニケーション」をとりあげ、その将来に「民主主義精神」へ結びつけていくなど、マクロ社会にかかわる個人の行為を見定めることに研究的関心を集中させているといつてよい。

今日では、マイクロ社会学の主流が、G. H. ミードを経て、H. ブルーマーなどによるシンボリック相互行為論に偏る一方、派生的にさまざまな理論化が行われている。それらの過程でもはやC. H. クーリーは、あまり注目されない方向に追いやられていると言わざるをえないが、そのことは、彼を正しく評価していること

になるのか、疑問である。ようやく、かけ橋を作った段階にすぎないが、次稿以下、検討を続けるつもりである。

引用文献・参考文献

- 注 1) G. ギュルヴィッチ、寿里茂訳「社会学の現代的課題」(現代社会学体系11) 青木書店、1970
注 2) 富永 健、「社会学原理」、岩波書店、1986、p. 4
注 3) 富永健一、前掲書、p. 3
注 4) G. ジンメル、居安正訳「社会進化論 社会学」(現代社会学体系1)、青木書店、1970、p. 180～p. 181。なお、この一節は、「社会学」の第一章「社会学の問題」にあたるが、引用した翻訳本の構成にもとづき、上記の表記とする。
注 5) G. ジンメル、前掲書、p. 181～p. 182
注 6) G. ジンメル、清水幾太郎訳「社会学の根本問題」、岩波文庫、1979、p. 20
注 7) G. ジンメル、前掲書、p. 20～21
注 8) G. ジンメル、前掲書、p. 23～24
注 9) 富永健一、「行為と社会システムの理論」、東京大学出版会、1995、p. 15
注10) C. H. クーリー、大橋 幸、菊池美代志訳「社会組織論——拡大する意識の研究——」(現代社会学体系4) 青木書店、1970。以下、大橋・菊池訳を引用する。
注11) C. H. クーリー、前掲書、p. 8
注12) C. H. クーリー、前掲書、p. 11
注13) C. H. クーリー、前掲書、p. 24
注14) C. H. クーリー、前掲書、p. 24～p. 25
注15) C. H. クーリー、前掲書、p. 29～p. 30